

諦を悟る

※諦＝真理・まこと

第五回 独自の技を創る(2)

政治哲学者にして、思想史家のアイザイア・バーリンは、有名な随筆「針鼠と狐(1953)」の中で、世間には針鼠型の人と狐型の人があると指摘しました(囲み参照)。



空手だけでなく、思想についての指導も行っている森氏(前列中央)。

古代ギリシャの寓話「狐はたくさんを知っているが、針鼠はたったひとつ、肝心のことを知っている」に基づいたものです。

狐は非常に賢い動物で、様々な策を考え、針鼠を捕まえるために、巢の近くでチャンスをつかおう。

巢から出てきた針鼠は、狐の殺気を感じて、丸くなり、針が突き出して、いつもの防衛体勢をとる。もちろん、狐は襲い掛かることができず、「今日もダメだった」とあきらめて帰りながらも、次の作戦を考えているという話です。

針鼠と狐の戦いは、毎日少しずつ形を変えて繰り返されるが、狐が毎回周到に練った作戦で襲い掛かっても、針鼠のとする防衛手段は「常に同じ」であり、「常に完璧」の防御手段です。

私は、本部研修生になった時、指導員と自分の実力の違いに、自信を喪失してしまい、悩んだ時期がありました。

この時、悩んだ末に単純に物事を考えて、「針鼠の概念」と同じように本質をとらえ、今までの稽古の方法を変えました。

その稽古方法は次の二つです。
①全力で最初から最後までやり抜く。限界に挑戦すること。

②どうにもならなくなったらぶつ倒れる。

辛い倒れることはなかったのですが、苦しくとも最後までやり抜いたおかげで力強く、スピードのある速い技を出せるようになり、

「気」を取り込み、「気」を放てるようにもなりました。

また、私は体が硬く不器用で、その上、左肘を手術して、左が使えなかったこともあり、徹底した技の研究も行いました。

しかし、他の人たちも勝つために相手を研究します。ゆえに勝利を掴んだ技がいつまでも通用することはありません。そうした状況下で生き残るためには、さらなる研究が必要となります。

私は足払いという技を、一貫して徹底的に考え抜き、次のような足払いの技を創っていただきました。

①後ろ足で相手の前足を払い、相手を倒した瞬間に突きで極める(左右)。

②後ろ足で相手の前足を払い、相手を倒さず崩した瞬間に突きを極める(左右)。

③前足で相手の前足を払って崩し、前足を払った瞬間に突きで極める(左右)。

④前足で相手の前足を払い、倒した瞬間に突きで極める(左右)。

⑤話めて行き、相手を精神的に圧迫し、相手の前足を自分の前足で払った瞬間、上段裏拳中段逆突きで極める。

⑥話めて行き、相手を精神的に圧迫し、「さそい」技を出させ、相手の技が突きでも、蹴りでも、前足が着地した瞬間に相手の前足を払い、倒れた瞬間に突きで極める。

⑦後ろ足で相手の前足を払った瞬間、同じ足

で相手の上段に回し蹴りを極める。

⑧相手が技を出そうとした瞬間、前足で相手の上段に内回しをする。その瞬間、前足で相手の首に足をかけ、後ろの足で相手の両脚に足をかけて、「かばさみ」にかけて倒し、その瞬間、水月をかかとで蹴って極める。

当初の成功をもたらした足払いの原則を維持し、他方では常に進化し、創造的に足払いの技を作っていた結果、私は世界の中心に12年間選手として活躍する事ができたのです。

・狐型の人/いくつもの目標を同時に追求し複雑なものとして理解する。力を分散させ、いくつもの動きを起している。全体的な概念や統一のとれたビジョンに考えをまとめていこうとはしない。

・針鼠型の人/複雑な世界を一つの系統だと考え、基本原理、基本概念によって単純化し、これですべてをまとめ、すべての行動を決定している。世界がどれほど複雑であっても、針鼠型の人たちはあらゆる課題や難題を単純すぎないほど単純な概念によってとらえる。

※基本概念①コンセプト②事物の本質をとらえる思考の形式

森俊博(もり・としひろ) プロフィール

昭和25年、宮城県亶理町出身。昭和48年東北学院大学(経済学部)卒業。第4回全空連全日本空手道選手権大会優勝(昭和50年)。第21回JKA全国大会(昭和53年)、第23回大会優勝(昭和55年)。第3回IAKF世界空手道選手権優勝(昭和55年)。師範、総本部理事、国際理事、政策委員。